
東方無人譚

K Y O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方無人譚

【Nコード】

N3540K

【作者名】

KYO

【あらすじ】

何の前触れもなく死んだと思えばよくわからない場所に飛ばされてしまった、無い無い尽くしの青年。

飛ばされた先は・・・え？東方なの？違うの？

第1話 『無』の人

本日、俺は何の前触れも無く交通事故でその生涯を終えてしまった。
と思ったのだが、気が付けばよくわからない暗い森に立っていた。

よし、まるで意味がわからない。

死んでからここに来る合間に天使とか神様とかと遭遇していたら二次創作的な意味で転生や異世界移動だと断言できるものの、そんなものは何も無かった。

ということはここは死後の世界でいいのだろうか？暗いのは夜だからか？それとも死後だからか？

そうだとすると、俺は結局何の面白みも無い人生を歩んでしまったようだ。

名前は神無月零という神も居なければ数字も無い名前だし、友達も居なければ恋人も居ない。

親も居なければ勿論親の形見も無い。運動能力や学習能力は皆無ではなかったがごくごく普通・・・つまり特徴が無かった。

まさしく無い無い尽くしの俺の性格はやる気もあり無く、周囲の人間曰く『主体性が無い』というか、周りに流されまくってる人間だよね』とのこと。

・・・こうして思い返すと本当に何も無い俺。趣味はせいぜい漫画とゲームくらいだがオタクといえる程のめり込みではいなかった。と言うかゲームは国民的RPGと某ナイスミドルが活躍するACT、そしてたまたまネットで知って嵌った東方projectくらいだ。あ、東方だけはやりこんでるから俺の人生何も無いわけじゃなかったか。まあ東方しかないとも言える訳だが。

・・・どちらにしろ何も無い人生を送ってたんだ俺は。死んだ後という今更過ぎる状況ながら、もうちょっと何か特徴のある人生を

歩んでみたかった。

まあ死後に辿り着いた場所が三途の川じゃなくて森ってところは特徴があるか。死後だけど本当に何も無いよりはマシ・・・あ、今更過ぎるけど俺足があるじゃん。幽霊じゃないの？

「んー、じゃあ夢遊病にでもなったのか？唯一の特徴が夢遊病とか勘弁なんだが」

とりあえずちゃんと自分の体を確認するためにあちこち見て触ってみる。

右手で腹に触ると体に触る感触が・・・無い？というか胴体部分が煙のように崩れた？・・・んでほっとくと戻ると。

これは幽霊でいいのか？しかしこの現象は明らかに幽霊ってイメージじゃないよな。

どちらかというと幽霊と言うより、アレ、あの漫画のキャラ・・・そう、アライブの広瀬みたいな感じだよな。この見た目のふわふわ感。

・・・広瀬？ちょっとまった、広瀬って確か『無力感』が原因で『無』の力を手に入れたんだよな？

で、俺は色々と『無』にまみれた人生を送っていて・・・うわ、なにこの符合。俺いつのまに能力者になったんだよ。

いや落ち着け。まだ断言するのは早い。まずは能力を解除して実体がある状態に戻るかどうかだ。広瀬は出来たから、これで俺が不可能だったら幽霊ってことになる・・・かもしれない。

しかしどうすればいいのか・・・とりあえず念じてみるか。

「戻れー・・・実体化しろー・・・さてどうだ！」

・・・いや、確認するまでもないんだよね。明らかにさっきまでと体の感覚が違うし、足が地に付いてる間隔があるし。

ということは俺は本格的に広瀬と同じ存在に・・・いやいや早合点はいけない。ここは冷静に事を進めるんだ。さて思い出そう。広瀬といえば無を飛ばして色々消し去る攻撃を使っていた。

ということは、俺が似たような攻撃を試してみて可能だった場合、本格的にアクロの心臓の器になる運命を持っているということになる。心臓存在するかわからないけど。ということでは試してみよう。

「でもこれも念じるだけで何とかなるのか？・・・とりあえず、何か球体っぽい感じでイメージを・・・」

右手を前に突き出し、掌を上へと向けて球体を形作るようにイメージする。

・・・うん、イメージが弱いのかちょっと歪だけど、色を持たない形の歪んだ球体が出来上がった。目に見えない筈なのにそこにあるのがわかるのはやっぱり俺が作り出したからなんだろうか？

とりあえずそこに乱立してる木に投げつけてみた。・・・そのままその球体の形に木の一部が消滅してしまった。そのまま大量の木を消滅させながら直進して行ってる。わーいやっぱり広瀬と同じだー・・・

「じゃねえ！？消えろ消えろー！」

消滅を念じると無の球体が消え去ったのを何となく認識できた。そして残ったのは抉れまくった木々。

うーむ、大輔の『再生と死滅』の能力があれば再生できそうだけど、俺は『無』だし諦めてもらおう。まさか大輔と同じ能力者まで近くにいるわけが無いだろうし。遠くならわからんけど。

しかし、死んで幽霊になったかと思えば死んで無くて能力者になつてるとかどうということなの？ まったくもって意味がわからないんだけど。

まさか何の前触れも無く憑依やら転生でもしたんだろうか。これも大概とんでもないが、ここまで意味がわからないことが続いているとむしろそれくらいの事が無ければ納得できない。

まあ俺が能力を手に入れたのか、俺が広瀬に憑依したのかは森から出て町を見るなり、水や鏡で顔を見るなりすれば解決するだろう。

もそ俺のままなら能力を見つからないように活用しつつ生活すればいいだけだしな。ここまで特別なことがあればもうあとは何時も通り特別なことの無い人生で文句ないし。

んじゃ、とりあえず移動を開始してみよう。・・・せっかくだから能力で実体を無くしてふわふわ飛んでいくか。

そのままふわふわと森を進んで1時間くらい経っただろうか。とりあえず月は確認できた。

俺は未だに森の中に居て・・・何やらそこらに生えているキノコが不穏な胞子をばら撒いてたり、よくわからない何かを感じたりという明らかに危険であろう場所を進んでいた。

しかしこの胞子とかは元々危険が無いのか、はたまた俺の能力が『無』のおかげで何も影響が無いのか・・・実体化して確認したらわかるかもしれないが、怖すぎて確かめる気になりません。

いい加減誰かに会いたい。1人は慣れてるので寂しくは無いんだが、流石に不安になる。

俺このまま遭難しないよな・・・？なにやら空腹にもならないし疲れもしないからそれは無いか。しかし不安だ。

最初居た辺りでは鳥の声とか聞こえてたのに、この魔の森としか言えない様な場所に入ってから生き物の気配がまったくしないんだが。

なんで俺はここに踏み込んだ時に引き返さなかったのか・・・

「・・・ん？孢子とかが薄れてきてるな」

もしかしたら魔の森を横断（または縦断）してしまったのかもしれない。それはそれで助かるんだが、出来れば人が居る場所に行きたい。

いや、もう人じゃなくてもいいや。妖怪でも幽霊でも何でもいから誰か来てくれないものか。・・・まさかここには俺しか居ないなんて事は無いよな？

「ねえ」

「うわっ！？だ、誰だ！びっくりするじゃねえか！でも出てきてくれてありがとうございます！助かりました！」

「よくわからないけど、そーなのかー」

きよろきよろと辺りを見回してみるが・・・誰も、居ない？

よーし落ち着け俺。俺が言ったんだからな。幽霊でもいいと。だからここはちゃんと受け入れなければ。

よーし深呼吸だ。吸ってー、吐いてー。

「えーと、ど、どこから話しかけてくれてるんでしょうか？」

「気付いてなかったの？上だよ」

ほう、上とな？

たとえ幽霊でも半透明の姿くらいは見えるだろうと思い、少女のような声で話す幽霊が示した方向へ首を向けると。

「で、聞きたい事があるんだけど・・・」

そこには月光を受けた金色の髪を風に靡かせ、両手を広げながら宙に浮いている黒い服の女の子――

「――貴方は、食べても良い人類？」

――俺が嵌っていた東方projectの『東方紅魔郷』に登場する宵闇の妖怪・ルミアと瓜二つな少女が、可愛い笑顔を浮かべながらそこにいた。

え？アライブじゃなくて東方なの？

第1話 『無』の人（後書き）

さて、新作始めてしまいました。
何してるんだろうね俺。
他にもSSあるのに。

第2話 この世界どの世界？

さて、アライブな能力を手に入れたと思ったら東方っぽい娘が現れた。

この流れは二次創作SS的に考えて、『他作品の能力を手に入れて異世界へ』といった感じだろうか。

なら俺の能力は『無』じゃなくて『無を操る程度の能力』か？いや、そこまで強力でも無いか・・・でも東方設定では能力が進化したり変質したりする事もあるらしいし、もしかしたらチート級な能力に進化するかもしれない。

いや、多分現時点でもよっぽどチートなんだろうけど。何せ殺意すらない一撃必殺の攻撃に、弾幕ゲーの意義を破壊してしまう無敵処理が常時展開されてるんだし。

・・・あれ、これって俺弾幕ごっこ出来ないよな？まさか弾幕ごっこで不可視の必殺弾幕を放つわけにはいかないし。これは困った。というかよくわからん場所に飛ばされてルーミアに出会ったか、明らかに幻想入りテンプレだよな。

「ふうん、無視するの？まあいいわ、大人しく私に食べられちゃってね」

ルーミア（仮）を見て硬直しながら脳内で様々な思考を続けていると、いきなり複数の妖弾を飛ばしてきた。

びっくりしてしまい回避が遅れた。というか戦闘なんて慣れてる訳が無いのですぐに行動できても避けられないだろうけど。

というわけで、妖弾は俺の胴体に直撃した。怪我も無く体が解けるだけだけどな！すぐに元に戻るし。

「あれ？妙に靈力が高いと思ってたけど、能力持ちだったんだ！。

しかも結構強力みたいだし・・・」

あ、俺霊力あったんだ。なら霊力の使い方を学べば弾幕ごっこ出来る様になるのかな？

と、襲われてるのにのんびりと考え事が出来るのは俺の能力がチートだと理解できているから。じゃなきゃ今頃咽び泣きながら土下座してる頃だ。

しかし、このルーミア（仮）にはどこか違和感がある。何かが違う感じなんだよな・・・実はルーミアの親戚とか？いや一人一種族の妖怪だったはずだからそんな事は無いが。

「なあ、あんた名前は？」

「そんな事聞いてどうするの？・・・ま、いいや。ルーミアだよ」

やはりルーミアだったらしい。じゃあこの違和感はいったい何なんだろうか。

どう見てもおかしな所なんか存在しないし・・・って、ああ！？リボンが無い！？じゃあまだ封印されてないのか！？

畜生、EXルーミア肯定派の俺としては封印されていない状態でも外見が変わらないのは残念すぎる。アダルトルーミアが凄まじい力を振るうSSとか大好きだったんだけどなあ。

・・・ちなみに、俺がこうして色々考えいる間にもルーミアは攻撃してきている。おかげで全部位それぞれ一回は形が崩れている。顔が崩れると視界も気持ち悪いことになった。目が分裂したら多分こんな感じなんだろう。

「もう、よくわからないけど面倒な能力ね。せつかく油断させて遊ぶ為にこんな姿になってるのに怖がりもしないし。本気になっちゃうんだから！」

え？本気って何？と聞き返そうとしたが、その言葉は俺の口から出る前に消え去った。

俺とルーミアの周りで起きている怪現象。まるでそこら中から闇が集まってきているような感じで・・・実際全ての闇がルーミアへと集っている。

これは・・・EXルーミアフラグか！？

ルーミの周り集まった闇はどんどん凝縮されてゆき、人の形に纏まると軽く弾けて闇が辺りに溶けていった。

そこから現れたのは、圧倒的オーラを放つ絶世の美女。

夜空に浮かぶ満月の様に輝く長い金髪を腰の辺りまで伸ばし、黒を基調に赤で装飾されたシックなドレスで身を包んだその姿は、妖怪というよりも女神のようで・・・

・・・やべえ、凄く強そう。俺の能力で対処出来るのかこれ？

物凄い不安になった。だってオーラがやば過ぎる。カリスマ溢れまくってるし、何か妖力っぽいのが視認出来る位になってるし。

「この姿に戻るのも久しぶりね・・・さあ、楽しませて貰うわよ？」

うわぁ、やばい。もの凄い危険を感じる笑みなのに美人過ぎてどうでもよくなってくる。口調も大人っぽくなってるし。

何故か従いたくなってくるが、やっぱりこれがカリスマなんだろうか。成程、畏れとはこういう物を言うのか。こりゃ確かに従わざるを得ない。他人を従わせるんじゃないやなくて他人が勝手に従ってくるのが真のカリスマなんですわわかります。

しかし楽しませると言われてもどうすればいいのか。俺戦闘なんか出来ないし、とりあえず逃げ惑えばいいのか？まさか『無』で攻撃するわけにもいかんだろうし・・・だってルーミアが好きなんです。

「・・・何なのよその能力！原初の闇で包み込んでも吸収も出来ないとかおかしいわよ！」

気付けば首から下が全部闇に包まれてました。道理で体の感覚がおかしなことになっていた訳だ。

でもこれで、EXルーミアでも俺の『無』の体を害することが出来ないということが判明した。やっぱりチートすぎる。

さつきからルーミアが闇で作った針とか剣とかを飛ばしてきたり、全身を闇で包み込んで圧縮してきたりと様々な攻撃をしてきてるけど、何の効果も無いせいで若干涙目になってる。

なんだろう、俺が悪いわけじゃないけど何故か罪悪感を感じる。やはり女の涙は武器という事か。恐ろしき精神攻撃。

「何なのよあなた！？弱かったら食べて、強かったら遊ぼうとしていたのに・・・接触すら出来ないとか非常識すぎるわよ！？」

「まさか妖怪という幻想的な存在に非常識と言われるとは思わなかった」

「何言ってるのよ、妖怪は確かに幻想だけど非常識では無いわよ！」

え、幻想なのに非常識的じゃない？それはどういう事だ？確か博麗大結界は常識と非常識を分けて、外界で非常識な存在になった幻想を引き入れるという効果を持っていた筈・・・

まさか、まだ幻想が普通に息づいている時代なのか？ということは俺は能力追加型トリップの他にもタイムスリップまで体験していると？

「なあ、今って何時代？」

「え？何よそれ、ジダイ？」

え？時代がわからない？

「ここって何ていう国？どこの大陸？」

「クニって何よ・・・世界にはここ以外に大陸なんて存在しない・・・あ、そういえば物凄く遠くにパシフィスって名前の大陸があったかしら？」

は？パシフィス大陸って何処？

「じゃあ・・・ここ、なんて大陸？」

「ムー大陸だけど？」

・・・なんですと？

「いやいやいやいや何その展開！？ムー大陸！？何その伝説の地！？意味わかんねえよ！？助けてえーりん！？」

「・・・ふうん、何か面白そうな感じがしてきたわね。詳しく話を聞かせて貰おうかしら？」

俺はいつたいどんな世界に来ちゃったんだよ！？アライブか！？東方か！？神話級の古代世界か！？それとも全く違うファンタジー世界なのか！？

誰でもいいからこの状況を説明してくれえ！？

第2話 この世界どの世界？（後書き）

パシフィス大陸も存在が確認されていない大陸です。
幻想にも程がある。

第3話 A・こんな世界

どうも、幻の大陸に来てしまった俺こと神無月零です。レイと呼んでください。

何やら混乱して色々暴走している時にEXルーミアさんに興味を持たれてしまったらしく、とりあえずお話しすることになってしまいました。

一応お話を拒否しては見たものの、

「話してもらっわよ?」

「いや、それはちよつと・・・」

「話してもらっわよ?」

「あの、それは」

「話してもらっわよ?」

「はい」

といった展開になりました次第で。

うーむ、この割と流されやすい性格を変えられないものか。今まで何度も同じ様な展開で苦労してきた覚えがあるんだが・・・主に学校での掃除や作業とかで。

しかし流石に全部話すわけにはいかないよなあ・・・いや、いつそ平行未来か異世界から来たと正直に話してしまおうか?

誰にも話さないよりは、誰か一人にでも話したほうが色々都合がいい事があるかもしれないし。

何より正直に話さなきゃいけない感じがするし。これだからカリスマオーラは困る。

「・・・というわけで気が付けばここに居た訳で」
「へえ・・・平行未来かぁ。そんなもの聞いたことも考えたことも無かったよ」

異世界は何となく理解してもらえたが、平行世界の概念はまだこの世界には無いのか、はたまたルーミア（今は小さくなってる）が知らないだけなのか言っても首を傾げるだけだった。

なので平行世界の説明から始まり、俺がここに来た経緯を説明した。平行未来の話について色々聞かれるかと思ったけど、ルーミア曰く「違うかもしれないとはいえ、先に聞くと実際に見たとき楽しめない」との事で聞かれなかった。正直助かった。

・・・あれ？もう少女ルーミアなのに俺なんで普通に話しちゃってるんだろつか。別に力リスマオーラ放ってないのに・・・ああ何時も通り流されたのか。

「で、平行世界の場合未来にはこの大陸は無くなってるのかー」
「ここが俺の知ってるムー大陸ならね」

しかしここがムー大陸という事は、さっき聞いたパシフィス大陸も架空・空想の大陸なのかもしれない。

まあ両方どっかの大陸の一部になってる可能性も否定できないんだが。

「じゃあ、今度は俺がここの事質問したいけど、大丈夫？」
「いいよー。面白い話も聞けたし、特別に何でも答えてあげる」

少女ルーミアかわええ。

ここ、ムー大陸について聞いた結果、様々な驚愕の事実が判明した。まず、神という概念が存在してはいるものの、神が存在した形跡は無くそれを信仰している人間は一切いないらしい。

一応この星に人間や植物等のあらゆる生物を作った神、つまり創造神が存在しているだろうと考えられているらしいが、これは単にそういう存在が生命を作ったと仮定しているだけとの事。

成程、だから概念だけが存在しているのか。

ちなみにルーミアは世界に光が生まれる前から存在している原初の闇から生まれたので、自分は神が作った存在では無いと考えているらしい。多分当たりだと思う。

次に、妖怪と人間は敵対している。これは妖怪が人間を襲い、人間が自衛するのだから当たり前の話だろう。

人間達は妖怪を『穢れた存在』と認識しているらしく、退治する時は霊力と武器を用いて容赦無く浄化し消滅させているらしい。俺妖怪扱いされないよな？

で、妖怪と少し違う存在として『悪魔』が存在しているらしいが、これは何処から現れるのかルーミアも知らないらしい。

海の向こうから来たのを見たことがあったとの事なので、案外遠くにあるというパシフィス大陸に生息しているのかもしれない。魔界は無いのかね。

んで、さっき武器と言ったんだが、これがまたんでもないらしい。というか人間の文明がどれくらい進歩しているのか聞いてみたら、既に現代レベルというトンデモ展開。なにそれこわい。

しかも神秘と同時に科学が進歩したせいで、現代人からしたら常識すぎる程にエネルギー効率の良い機械等が普通に存在してるみたいだ。

というか霊力を効率よく圧縮して放つ銃って、ビームライフルか何か？まるでGS美神の様だ。文殊使い何かが現れたら妖怪終了のお

知らせなんだが。

でも妖怪と日々戦いながら技術を進歩させてきたせいか、宇宙開発は全く進歩していないようだ。というかロケット飛ばしても墜落させられそうだしな。

そして妖怪の話。

妖怪達は種族の違いがあるものの、基本的には群れを成して行動しているらしい。そうしないと人間の超兵器に勝てないとの事。さっきまで居た魔の森（仮名）も妖怪達が人間から逃れるために作り上げたものらしい。

で、強力な能力を持つ大妖怪が群れの頂点に立って小妖怪達を率いていて、そんな群れが複数あるとの話。全員結集しないんだろ？かなみにルーミアは妖怪の中でも破格の能力を持っていて、基本的に一人で問題ないのでぶらぶら散歩しているだけの生活をしているらしい。強すぎる。

というか何なの、能力が『闇と夜を統べる』ってどういう事なの？相手を原初の闇に溶かすとか何なの？夜に生きる妖怪達も率いようと思えば能力で簡単に従えられるとかどうということなの？

これが封印されて『闇を操る程度の能力』になるとか信じられん。そりゃ『程度』って言いたくなるわ。

というかまだ『程度の能力』って言わないんだな。

他にも色々聞いたが、目ぼしい情報はこの位だった。

ムー大陸が無くなったのって、超神秘科学でどっかに大陸ごと転移したからじゃないのかと思えてきて仕方が無い。

「で、レイはこれからどうするの？」

「そこなんだよねえ」

『無』の状態だと痛みも無いし怪我しないし、食欲も睡眠欲も多分

性欲も無いし、空腹にもならないのでこのままでいればどうにでもなりそうではある。維持に霊力を使うわけでもないから時間制限もなさそうだし。

無の弾丸は霊力使うみたいだけどな、試した時気のせいかと思ってたけど、何かが減った感じがしたし。

それはともかく、いきなりここに放り出された俺にはやる事が無い。とりあえずはムー大陸を旅して回るつもりだが、それも終わったら完全にやる事が無くなってしまう。

パシフィス大陸に行こうにも場所がわからない・・・まあ探せばいいか。あ、襲われないなら人間の街に行って色々見てみたいけど、大丈夫だろうか？

あと術者に会って霊力の使い方を勉強したいし・・・あれ、意外とやりたいこと多いな。

「とりあえず大陸回って、入れそうなら街にも行きたいかな」

「そーなのかー。じゃあ私も付き合うよ。暇だし、一緒に居たら面白そうだし」

「いや妖怪が街に入ったら大問題だろ・・・見つかったら大変だぞ」

「目撃者は食べればいい」

「いやいやいやいや」

結局街に入る時は妖力を抑え闇に姿を変えて俺の中に隠れる事になった。実体が無いからこんなことも出来てしまうのだ。

それにしても、少女に突っ込むのではなく少女に突っ込まれるとは俺も妙な経験をするものだ。

「変な言い回しはしないでね」

「ごめんなさい」

ともかく、こんな感じでルーミアと俺の珍道中が始まったのだった。

面白いものが見つかるといいけど。

第3話 A・こんな世界（後書き）

ここで紹介した設定は何の前触れも無く変更される可能性があります。

第4話 月の魔力

さて、ルーミアとの二人旅も始まって早くも一週間も経ってしまった。時間計算は太陽の昇った回数で数えた。

一応現代での日付の数え方をルーミアに聞いてみたものの、そういった事には全く興味が無かったらしく知らないと言われてしまった。そんなんだからバカルテットとか言われるんじゃないのか。

というか、ルーミアは自分が興味を持った事以外は全然知らない事ばかりのようだ。知ってるのも主に食に関してという、いかにもルーミアな思考。

原作のルーミアとの違いは、そこまで人間を好んで食べるわけでは無いという所か。好きではあるが、仕留めるのが面倒らしい。だから丸腰の俺が狙われたという事か。

まあそんな事もあり、ルーミアは狩りが異様に得意だった。遠距離から標的のイノシシっぽい生物の影を操って心臓を貫くとか避けようが無い。

操影術ってルーミアが始祖じゃないだろうな・・・始祖じゃないとしても、ルーミアのこの技を見た魔法使いが参考にしたとかあり得そう。東方で操影術見たこと無いけど。

「レイの能力って何か応用出来ないの？」

ルーミアが前に拾ったという燃料切れにならないライターでイノシシ（仮）を焼いていると、そんな事を言われた。ちなみに実体化している。そうじゃなきゃ食事出来ないし。

生存には必要無いとはいえ、食事は大事な娯楽です。精神の栄養なんです。

「応用？」

「うん、自分の実体を『無』くすのと、『無』の弾丸しか見たこと無いし。もっと色々出来そうな気がするから」

「色々かあ」

『無』で出来そうなことといえば・・・無は何も無いって事だから、結果みたいなのを作ったら外界からの干渉を全部遮断出来たりするんだろうか。・・・結界内部を全消滅なんて結果を引き起こしそうで怖いな。

無だから存在しないってのもあり得そうだから、何かをこの世から完全に消し去るなんて事も出来そうだな。物体は勿論、相当熟達したら概念なんかも消せるようになったりして。

そついや『無理』とか否定的な意味合いも持つてるんだよな。なら正方向のベクトルを負の方向のベクトルに変換できたり・・・これは流石に無いかな。可能だったら『無と負』の能力になりそうなんだが。

「まあそんな感じで、色々妄想する事は出来るけど実現できるかはわからないって所かね」

「ふーん・・・試してみれば？」

「そうだな。色々出来た方が面白そうだし」

「そうそう、面白そうだし」

そんな話をしつつ、イノシシ（仮）は俺達の栄養に変わりました。この肉うめえ。

食後、草むらに寝転がって寝ようとしている俺達。

月明かりを浴びているとざわざわする感じがしたので空を見上げると、もう少しで満月になるであろっ月があった。

「もうすぐ満月だね。嫌だなあ・・・」

「ん？妖怪にとって満月は良いものなんじゃないの？」

月光を浴びて妖力回復とか、パワーアップとか、そんなイメージがあるんだが。

「レイが居た所ではそうなのかもしれないけど、ここじゃ大変なんだよ。確かに月光で力が回復はするんだけど・・・」

「けど？」

「満月の月光は力が強すぎて、その上狂気を孕んでるのよ。人間も妖怪もそれに影響されて暴走したりして面倒で仕方無いの。私も多少気分が高揚するだけとはいえ、影響されちゃうし」

「それはまたとんでもない・・・」

満月の時は実体化しないほうがよさそうだ。実体化した途端狂気に侵されるとか勘弁だし、暴走した妖怪がいきなり襲ってきて怪我したら嫌だし。

「妖力も霊力も使った分だけどんどん回復するから、暴走した人間と妖怪が争いでも起こしたらとんでもない事になるわ。人間達は対策をとつてあるみたいだけど」

「妖怪は科学力で対策なんか出来ないしなあ」

「大抵は暗い森や洞窟なんかでやりすごすんだけど、馬鹿な奴は普通に外に出るから・・・全く大妖怪達もちゃんと統率して貰いたいよ」

ちなみにある程度の強さを持った大妖怪なら、ちよつと影響される程度で済むらしい。月怖い。これが本当の月狂^{ルナティック}って事か。

この世界はちよつと物騒すぎると思う。月はもつとこう、安らぎを

与えるような感じじゃなきゃダメだろう。こんな月じゃ誰も月見なんかしない・・・え？

「・・・あれ、どうしたの？」

「あ、いや、多分気のせいだけど・・・こっちの月って動く？」

「満ち欠けはするし昇って沈んだりはするけど、どれは違うの？」

「違う。こう、揺れるというか、増えるというか」

「気のせいじゃない？月ばかり見てるから目が狂ったとか」

「怖い事言っなよ・・・」

一瞬、黄色い普通の月と、それよりデカイ赤い月が見えたんだが・・・いくら幻想に満ち溢れてる世界とはいえ、流石にそれはないよな？本気で目が狂ってたら困るからさっさと『無』になって寝よう。

「ところでいつになったら人間の街に着くんのだ？」

「ん？この大陸は妖怪と人間がそれぞれ半分ずつ陣取ってて、今私達が居るのは妖怪側だからまだまだ先だよ。向かってる方向も妖怪側の奥の方だし」

「なん・・・だと・・・」

第4話 月の魔力（後書き）

ルナティック・ハイ！

事実かどうかは知りませんが、満月の夜は事件の発生率が増加するという話を聞いた事があります。

そんなところに住んでるから二次創作での月人がみんな嫌な人なんだろうか。

第5話 未来の危機

- - - 観測開始
- - - エラー
- - - 異物が二匹
- - - 現状放置
- - - 後に再観測にて方針を確定
- - - 観察終了、他世界観測開始 - - -

- - -

「『声を聞く』能力の妖怪？」
「うん」

妖怪側が占拠している土地を奥へと突き進みながら会話をしていると、ルーミアがこの辺りに居るという妙な能力を持つ妖怪の話をしてくれた。

なにやら満月が近づくと『声』が聞こえるようになるという。その声は現在や未来の様々な情報を発しており、それによりこの先どんな事件が起こるのか予測するというものだ。

簡単に言えば使い勝手の悪い未来予知のようなものらしく、『声』から得られる情報で判明するのは大規模な事件ばかりらしい。

例えば未曾有の自然災害、例年以上の狂気を放つ満月、大地震等。それらの情報を事前に得られる妖怪はやはり重宝されるらしく、全ての妖怪の群れはその妖怪に手出ししないようにしているらしい。そりゃそうだ。自分達の身を守る為の重要な情報をくれる相手を害する奴なんていないわな。

で、ちょうど満月が近いことだし、この辺りからだとすぐ行けると

の事なので行ってみることになった。

現在俺達が進んでいるのは木が密集している山の中で、このまま先に進むとその妖怪が住んでいる洞窟があるとの事だ。

「にしても、『声』ねえ・・・神の声だったりしてな」

「うん、あいつ自身もそう考えてるみたいだよ。何か凄い上から視線な感じの声なんだって」

「冗談で言っただのに事実の可能性があると驚くんだが」

しかし神ねえ・・・ここには創造神しか居ないみたいだから、その声なんだろうか。なんだつけこういうの、オラクルって言っただったか？神の言葉を聞く事って。

これが事実なら結構凄い能力なんじゃないだろうか。八百万の神ならともかく、創造神だしな。とんでもない情報が手に入りそうだ。

「ついたよ」

「これはこれは・・・普通の洞窟だな」

「変な洞窟なんかには誰も住まないでしょ」

「それもそうか」

どこからどうみても普通の洞窟だった。入口に変な結界が張られてるとか、ダビデの星が刻まれてるとか、門番らしきゴーレムがいるとかそんな事は全く無い普通の洞窟だった。

神の言葉を聞くななんて凄い能力を持つてるんだから、周りが神聖視してももう少し立派な所に住めるんじゃないか・・・と思ったけど、これは人間的な考え方か。妖怪はそこまで神を重要視しないわな。その上神が存在するかもわからないって前に言ってたし。

ともかく、何か凄い事件の『声』が聞こえていないか尋ねるために俺とルーミアは洞窟へ進入した。

・・・あ、俺これから初めてルーミア以外の妖怪とともに話が出

来るのか。雑魚妖怪はよく遠目に見かけたけど、会話は出来なかったんだよな。ルーミアを怖がってたみたいで。

洞窟は案外深くなかったらしく、すぐに生活観を感じる場所に辿り着いた。

しかし暗い。入口が近いから多少の光が入ってきてはいるが、それでも奥の方は暗くてよく見えない。

というか、その『声』を受信する妖怪は何処に居るんだ？

「ねえ、何でそんな隅っこで震えてるの？」

ルーミアが目を向けている場所に目を凝らすと、明りの届かない部屋の隅で蹲りながらガタガタと震えている、牛の様な角や耳・体毛を持つ青年姿の妖怪が居た。

牛と人間が混じった姿で、重大な事件についての『声』を聞いて予言として伝える・・・まさか、件の妖怪くだんだろうか？

昔何かの漫画で読んで知っていたのでそう推測したが、件って生まれてすぐ死ぬものじゃなかったっけか？・・・いやそんな事は今はどうでもいい。

嫌な予感がする。件の予言は絶対。なるほど、現在か未来かはわからないが、創造神が言う事なのだからほぼ確実なのだろう。もしかすると創造神自体がその事件を起こしている可能性すらある。

そんな能力を持つ妖怪が、何かを恐れているかの様にガタガタと震えているのだ。明らかに嫌な予感しかないというもの。

・・・聞いてみるか。

「始めまして、俺はレイだ。よろしく」

「・・・あ、ああ。カタリ。カタリだ」

話しかけてようやく俺達に気付いたのか、何かに怯えながらも自己

紹介してもらえた。

どうやら恐怖はしているが、そこまで精神が追い詰められてないのかもしれない。

「で、だ。一体どんな声を聞いたんだ？そこまで怯えてるって事は相当やばいのか？」

「今までのも結構酷いのがあったけど、カタリがそうなるのは始めてみるよ」

「・・・終わるんだ」

・・・こりゃ、とんでもない展開が待ってそうだぞ。

「もう少し詳しく話してくれ」

「こ、今回聞いたのは、おそらく数百年くらい、未来の話だと思う。神を名乗る奴が、『この星の生命を一度処分してやり直す』って、言ってたんだ・・・」

「へえ・・・それは、確かにとんでもないねえ」

ルーミア、なんでそんなに楽しそうにしてるんだ？・・・いや、それはともかくとしてだ。

生命を処分してやり直すとは、明らかに神視点の発言だな。これが何百年後の神の発言なのかはわからないが、結構やばいのは確かだ。しかし数百年後か・・・俺って生きていられるのか？『無』が死も老化も『無』くしてるなら生きられるだろうけど・・・どちらにする人間の俺には気の長い話だ。

でも、既に何百年・何千年と生きている妖怪達には俺ほど長い時間には感じられないんだろう。だからこそ、このカタリは怯えているってわけだ。

仕方ないわな、神が世界を終わらせるって決めた事を知っちゃったんだ。どうせ死ぬからといって自暴自棄になって暴走しないだけマ

シか。

「神かぁ・・・ねえ、妖怪達で神を殺すって、面白そうじゃない？」

「そんなこと考えてたのかよ・・・」

「だって、面白そうじゃない。神殺しだよ？」

今は少女姿とはいえ、流石凄まじい力を持つてる妖怪だな、ルーミアは。発想がとんでもない。

でも、神殺しか・・・可能性は無いわけではないのか。『声』では実行しようとしている所みたいだし、その後の結果はまだわからないしな。

「神を殺すんなら妖怪だけじゃなくて、人間とか悪魔とか全員が協力しなきゃ無利じゃないか？」

「そう？でも悪魔は詳しく知らないからともかく、妖怪と人間が協力なんて無理じゃない？」

「俺とルーミアが仲良くなってるんだから、やってやれない事は無いと思うぞ」

「そうかな？」

まあこんな会話をしてはいるけど、実際神殺しなんてとんでもない事がそう簡単に出来るわけが無いだろう。

どこかこことは違う世界でも作って非難した方が安全・・・あ、でも神から逃げられるんだろうか？

「ともかく、今までで一番危ない内容だね。妖怪の群れの長には伝えたの？」

「つ、伝えた。次の満月が終わってから北の山で会合をするから、来てくれと言われた」

「そう、じゃあまた今度来た時に会合の結論を教えて」

「あれ？ルーミアはその会合に参加しないのか？」

「私は妖怪を統率してるわけじゃないから、別にいいんじゃないかな？」

そんなんでいいのか？と思ったが、まあルーミアがいいと言っているのだからいいのだろう。気にしないことにする。

それにしても、神ねえ・・・俺がここに飛ばされて、神が生命を一掃しようとしていて・・・まるで俺が主人公の漫画か何かみたいな展開だな。

まさか俺が神殺しのキーパーソンになったりする事はないとは思うけど、何か作為を感じてしまう。

・・・生命を一掃しようとしているのは自称神で、それを止める為に本当の創造神が俺をここに呼んだとか・・・いや、これも無いか大体俺は主人公タイプじゃないんだ。『無』なんて能力は大抵敵キヤラだろう。中二病な作品なら主人公足りえるけど。

まあどちらにしろ、俺がその時まで生き残れるかどうかだな。老いず死なないなら能力の訓練をして、いつかくる終末に備えてみるか神を『無』に帰すのは不可能だとは思うが、神の影響を『無』くす事は出来るかもしれないからな。

「なんか俺も楽しくなってきたかも」

「そうそう、楽しまなきゃ損だよ？」

さて、ムー大陸の未来はどうなるのやら。

第5話 未来の危機（後書き）

何これ東方？

はい、東方です。

第6話 行き倒れ悪魔

とんでもない危機が未来に待ち受けていると知ってから数日。

危機とはいえ何百年後という規模なので俺とルーミアの旅に特に変化があるわけも無く、様々な妖怪と出会って雑談してみたりと平和にムー大陸を歩き回っていた。

旅の途中で満月の日を体験したが、確かに月光の当たる場所は何だかよくわからないパワーに満ち溢れまくっていた。

ただの野生動物も雑魚妖怪並の身体能力を持って暴れまくっていたし、たまたま遭遇した雑魚妖怪も理性がぶっ飛んでいてアホみたいな行動（ひたすら月に向かってジャンプ）を繰り返していた。

幸い俺は『無』の能力のおかげか月の影響は受けなかったが、ルーミアは妖力を持て余して大人形態になって余剰妖力を撒き散らしていた。

満月の影響を受けたのかルーミアは熱に浮かされている様に顔を赤くしていて、大人形態の美しさと相まって正直色々やばい事になった。なんかエロいんだよ。

まあ思考能力や行動に影響が出るほどではなかったらしいのでそのまま旅は続けていたが、満月の度にああなるのかと思うとちょっと不安でちよつと楽しみだ。

そして現在居るのはムー大陸の最西端。ここでルーミアは悪魔が飛んできのを見たらしい。

ちなみにムー大陸は西側半分を妖怪が、東側半分を人間が占領しているらしい。いつか最東端にも行ってみたいものだ。

「で、悪魔ってどんなの？」

「えっと、あんなの」

「は？」

ルーミア（今はもう少女形態）が指を指した方向に目を向けると、何やら行き倒れっぽい感じに倒れている青い髪の少女が居た。

うん、悪魔っぽい羽が生えてる。でも悪魔らしいのはそこだけで、服装は普通に可愛い赤のワンピース。

これが悪魔なのかと突っ込みたくなるが、東方っぽい方向性で考えれば十分に悪魔な外見だろう。

しかし悪魔が行き倒れとは、なかなか珍しいものを見た。飛んできて疲れたんだろうか。

「とりあえず、あの悪魔どうするよ？」

「食べる？」

「俺は流石に冗談だと判るが、そういう判りにくい冗談は止めた方がいいぞ。ほら、悪魔が地面を這いながら逃げようとしてる」

「つままないなあ」

冗談と判ると悪魔は崩れ落ちた。無駄な体力を使わってしまったようだ。

ま、とりあえず助けてやることにしようか。旅は道連れ世は情けつてね。

「ふう、助かりましたあー」

と、いうわけで悪魔少女を助けてやった俺達。

倒れていた原因が空腹という情けない理由だったので、俺が旅の途中で作った保存食（ただの燻製肉だが）を分けてあげたのだ。

理由が理由なので恥ずかしそうにしていたが、空腹には耐えられなかったらしく大人しく燻製肉を食っていた。

「でも、なんで空腹で行き倒れなんてしたの？」

「えっと、私はパシフィス大陸から飛んできたんですー。で、途中で悪天候に見舞われて食料落としちゃった上に、進行方向を見失って迷ってしまっただけー」

「成程、何も無い海上で迷子になって何も食ってなかったのか。海の上なんだから魚でも取って食べればよかったのに」

「魚は苦手なんですー」

だからといってそれで餓死なんてしたら恥ずかしすぎると思うんだが。

「ところで、パシフィス大陸って悪魔達が住んでるんだよね？」

「はいー。こつちと違って人間もいませんよー」

「へー、ちよつと行ってみたいかも」

「道に迷わなければ1日飛べば行けますよー」

1日飛べば着く距離で、悪天候に見舞われて大変だったからといって空腹で倒れる程まで道に迷うとかどういうことなんだろうか。

そんなことを考えていると表情に出ていたのか、こつちを見た悪魔少女に「た、たまたまですー！」とか色々弁解された。

どうやらこの悪魔少女は、悪魔達のトップのお使いでここまで来たらしい。

お使い内容は「『声』を聞く妖怪に何か重大な事件の『声』が聞こえて無いか聞いてくる」というものらしい。

「なんでも前に一瞬、月に妙なものが見えて、嫌な予感がしたかららしいですー」

「ふーん。あ、カタリの聞いた『声』なら私達も教えてもらったか

ら、教えてあげるよ」

「あ、ありがとうございますー！」

なにやらルーミアと悪魔少女が話しているが、俺はそんな事を無視して今聞いた情報に驚いていた。

悪魔達を纏めているという存在が月に見たという、妙なもの。

気のせいだとは思っていたが、俺も少し前に一瞬だけ巨大な赤い月が見えたことがあった。

俺が見た赤い月。悪魔達のトップが見た妙なもの。そしてカタリが聞いた未来の『声』。

なんだろうこの展開、まるで何かの物語のような流れだ。しかも俺が主人公的な立ち位置の。

いや、もしかしたら主人公の立ち位置には他の人物が居るのかもしれないが、この流れだと俺も結構重要な位置に居る人間だろう。

何せ俺と悪魔のトップが見たものが『月』という部分で共通している、俺は満月が放つ狂気を無効化できるのだ。

まさか神が生命を抹殺する時に月を使うんじゃないだろうな・・・というところまで考えて、考えるのを止めた。

いかな。こんな妄想としか言えない様な事を考えるなんて、まるで空想に浸って変なことをしている中二病患者じゃないか。

・・・何だか疲れてしまい、思いつき深く溜息を吐いた。

「というわけでレイ、パシフィス大陸に行くよ」

「話を聞いてなかったから何がどうなったのかわからないんだが・・・まあいいや」

「道案内はお任せくださいー」

真っ直ぐ飛ぶだけですけどねー、と言って悪魔少女は飛び上がった。それに続いてルーミアも飛び上がる。

んじゃ、俺も・・・おっと。

「ちょっと待った」

「ん？どうしたの？」

「何か問題でもありましたかー？」

「重要な問題だ。これを何とかしないと大変な事になってしまう」

二人ともきょんととして首をかしげている。

ルーミアはともかく、悪魔少女はこの事に気付かないと大問題なんじゃないかなあ・・・と苦笑してしまった。

「食料がもう無いから、調達してからにしよう」

第6話 行き倒れ悪魔（後書き）

悪魔の名前考えてないや。

でも真名明かすのも無理だろうからどうでもいいよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540k/>

東方無人譚

2010年10月9日17時15分発行